

産後の不安尺度の開発と関連要因の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永田, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2003354

論文内容の要約

学生番号	3216003
氏名	永田智子

主査	飯島 佐知子
副査	伊藤 龍子
副査	高橋 眞理

学位論文名	産後の不安尺度の開発と関連要因の検討
訳タイトル	Development of the postpartum anxiety scale and study on associated factors
共著者	

論文内容の要約

【目的】

産後の不安障害はうつ病よりも高い罹患率であり、乳幼児の情緒的問題や産後うつ病のリスク要因であるにもかかわらず、研究や介入が軽視されている。また、診断基準は満たさないが、生活に支障や苦痛が生じている不安を持つ女性への支援の必要性が報告された。しかし、本邦では、産後の不安に特化した信頼性妥当性が検証された尺度は数少ない。本研究の目的は、診断基準は満たさないが、生活に支障や苦痛が生じている看護介入が必要なレベルの産後の不安を測定する尺度を開発し[調査 1]、産後の不安の関連要因を探索すること[調査 2]である。

【方法】

尺度原案の作成:産後の女性へのインタビュー調査の結果や国内外の周産期の不安尺度の項目などを集約し、300項目のアイテムプールを作成した。その後、内容妥当性、表面妥当性を確認し、78項目の「**産後の不安尺度試作版**」を作成した。次に、Web調査によるプレテストを実施し、回答に偏りがある項目を修正し、78項目の「**産後の不安尺度原案**」を作成した。

データ収集:産後半年以内の女性を対象に、2018年7月～9月、乳児健康診査や子育て支援施設などで質問紙を配布し、郵送法において回収した。

データ分析:項目分析、探索的因子分析の後、内的整合性、併存妥当性、既知グループ法により、信頼性と妥当性を確認した。尺度のカットオフ値は、ROC解析を用いて算出し、産後の不安の関連要因は、*t*検定や相関関係の確認により有意な結果がみられた変数を独立変数、産後の不安尺度合計点と下位尺度得点を従属変数とした、数量化I類の分析を行った。

【結果】

質問紙は972部配布し、調査1は376名(有効回答率38.7%)、調査2は298名(同30.7%)を分析対象とした。

調査 1:「生活・認知・感情コントロール」、「母親としての能力」、「子どもの健康と安全」、「パートナーとの関係性」、「出産後のキャリア」、「子どもへの応答性」の28項目6因子構造による産後の不安尺度が開発された。各因子のCronbach' α 係数は $\alpha=.552\sim.880$ となり、一定の信頼性が確保された。また、尺度合計点とEPDS不安因子($r=.602$)、DASS不安因子($r=.508$)、EPDS合計点($r=.675$)、生活のしづらさ5項目($r=.360\sim.507$)の間に正の相関がみられ、併存妥当性が確認された。さらに、複数回の産後の家庭訪問群が通常の家訪問群より尺度合計点が有意に高くなり($30.36\pm 11.85/26.02\pm 11.58, p=.041$)、既知グループ法による妥当性が確認された。尺度合計27点とするカットオフ値は、AUC .73、感度 .70、特異度 .63であり、一定の診断予測能力をもつことが示された。

調査 2:数量化I類を用いた分析の結果、精神疾患の既往、産後の身体の不調、経済的不安、就業状況、パートナーの家事育児への協力、相談相手、ソーシャルサポート、出産歴が尺度合計点または下位尺度得点に影響を及ぼしていた。

【考察】

開発尺度は、生活に支障や苦痛が生じている看護介入が必要な不安の測定に有用であることが示された。また、評価方法は、カットオフ値による一律のスクリーニングではなく、高得点因子や項目に着目し、具体的な不安の内容に特化した看護介入を行う必要がある。今後は、ハイリスク集団を対象とした検討、不安の脆弱性などの個人特性および子どもの気質や啼泣なども含めた関連要因の検討を進めていくことが必要である。

【結論】

産後の不安尺度の信頼性妥当性が検証され、産後の不安の関連要因は、精神疾患の既往、産後の身体の不調、経済的不安、就業状況、パートナーの家事育児への協力、相談相手、ソーシャルサポート、出産歴であることが明らかになった。